

令和 6 年 6 月 16 日現在

機関番号：25403

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2021～2023

課題番号：21K00766

研究課題名（和文）オンライン授業時代における英語eラーニングの学習質保証

研究課題名（英文）Ensuring the Quality of English E-learning in the Era of Online Classes

研究代表者

渡辺 智恵（Watanabe, Tomoe）

広島市立大学・国際学部・教授

研究者番号：80275396

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の結果、多くの大学の正規英語授業でeラーニングは取り入れられているが、成績評価に反映されるのは、教材の消化率や正解率のみであることが多く、授業の事前・事後で効果測定を厳密に行っている大学はさほど多くないことが明らかになった。また、ほとんど読んだり聴いたりすることなく、クリック・アンド・ゴーを繰り返すといった不適切学習については、不適切学習を判別することが困難であり、ほとんどの場合、何ら対策が取られていないことが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究において見いだされた様々な事例と学習の質保証における一定の見解は、eラーニングを含めたオンライン授業がますます活用される中で、教師にとってもそれを導入使用する大学にとっても大きな指針となるであろう。また、eラーニングを開発する企業等にとってもシステム開発に知見を活かすことが可能となり、英語教育関係者や大学を目的や意図を汲み取ったシステム開発への道標となることが期待できる。さらにこういった学習管理に関する研究は、今後の英語eラーニングシステムの研究においても重要な視点や示唆を与えることができると考えている。

研究成果の概要（英文）：The results of this study revealed that while e-learning is integrated into regular English classes at many universities, the evaluation of grades often reflects only the rate of material completion and correctness. It was also found that not many universities conduct strict pre- and post-class effectiveness measurements. Additionally, it was discovered that there are almost no measures in place to address inappropriate learning behaviors, such as repeatedly clicking through without properly reading or listening, due to the difficulty in identifying such behaviors.

研究分野：英語教育学

キーワード：英語eラーニング 質保証 英語学習 LMS

1. 研究開始当初の背景

近年、英語教育においてeラーニングを取り入れている大学が増えている。単位に関係なく自学習用としてであれば、おそらくほぼすべての大学がなんらかの英語 eラーニングシステムを導入しているであろうし、単位を認定する正規授業として利用している大学も年々多くなってきている。それに加えて、コロナ感染予防という点から多くの授業がオンライン対応となったことで、英語の授業についてeラーニングを取り入れた大学がさらに増加した(本申請書では英語eラーニングをオンライン授業の一形態としている)。

一方で、eラーニングも含めたオンライン授業の導入については、内部質保証が厳格に求められる状況も相まって、大学に限らずすべての教育組織において、対面授業と同等以上の学習質保証が可能かどうか大きな懸念材料となっている。懸念要因の一つとなっているのが、英語教育を含め、教育へのコンピュータやネットワークの活用が増えるにつれて問題となっている「不適切な学習」や「不適切な学習行動」である(Berret 2010; Dante 2010)。教室のように教師の目の行き届かないオンライン授業では、学習者が本当に学習に真剣に向き合っているのか、確認する術がほとんどないからである。例えば、Figlio 他(2010)では、同じ講義を対面式で受講した学生と、いつでも都合のよい時に視聴できるオンデマンド式で受講した学生の成績を比較し、対面式の講義を受講した学生の成績のほうが勝っていたことを報告し、オンデマンドで受講した学生はいつでも視聴できると考えて実際の視聴を先延ばしにし、結局は試験直前に駆け込み視聴(last-minute cramming)をしてしまう傾向があり、それが成績が不振につながっている可能性を指摘している。実際に申請者の勤務する大学で実施している英語 eラーニングにおいて不適切学習の発生率を調査したところ、特に英語を苦手とする学生達については、教材の不正・不適切消化がより頻繁に散見され、学習全体の不適切学習発生率が19.5%であり、リーディング学習では4.1%、リスニング学習では34.0%、文法学習では20.5%が不適切な学習であった(渡辺・青木 2011)。

eラーニングシステムには、教材配信や正誤フィードバック以外に、学習進捗状況などを管理するLMS(Learning Management System)が装備されている。LMSには進捗状況管理以外にも、学習カルテ、学習締切、学習ログ、小テスト、質疑応答など様々な機能が装備されており、eラーニング担当者はこういったデータ記録を参照しながら学習管理を行う。さらにLMSに残された学習記録に基づいてどういったフィードバックを学習者に随時与えるか、また成績に反映させるか等、LMSだけでなく教師自身の管理も合わせて、学習の質をできる限り担保するように意を用いて、授業全体のマネジメントを計画するのが通常である。

しかしながら、こういったマネジメントが実際にどの程度英語 eラーニング学習の質を担保することに成功しているか、また学習者の自主性や自律性に最終的につながるものとなっているかなどについては、オンライン授業がますます活用される中で、様々な角度から研究する必要のある喫緊の課題であるが、寡聞ながらこういった観点からなされている研究はない。

2. 研究の目的

本研究では、大学授業で活用されている(単位等に関係のない課外学習ではなく)英語eラーニングにおいて、LMSにどういった機能が搭載され、それらを教師がどのように活用し学習管理を行っているか、またそれが学習の質保証に有効な形となっているか、さらにこういった管理が、教師や学生側からみて、最終的に学習者の自律性につながる方向に向かっているのか、eラーニングにおける学習の質管理と自主性における最適解を探ることを目的としている。

3. 研究の方法

本研究の実施については、以下の手順で進めた。

単位取得授業に英語 eラーニングを用いている大学を対象として、現地調査及びアンケート調査を用いて、1)使用しているeラーニングシステムのLMSについて、どういった学習管理機能を装備しているかを調査する、2)それらの機能や残された学習記録が実際に学習管理にどのように活用されているかについて、また教師や管理者がLMSとは別にどのような学習管理を行っているのかについても、教師や管理者から聞き取り調査を行う、3)これらの管理が学習の質を担保することに成功しているか、次の点から調査する:学習時間、学習量、学習の質、学習のコンスタントさ、不正・不適切学習の割合、小テストやTOEIC等の標準化テスト結果等、4)こういった管理が有効なものであるか、また学習者の自律性につながり得るか等、教師・管理者、学生に聞き取り調査を実施する、5)これらの調査から、次の点について作業仮説を得る:LMSによる自動管理と教師による管理との間の最適解、管理と学習者の自主性における最適解、学習中の管理(プロセスの管理)と学習後の結果の管理(プロダクトの管理)の最適解、さらに6)これらの管理が学習者の英語に対する動機の高低によってどのように変化するのかについての

見解を得る。

現状では、英語の授業で e ラーニングを導入している、授業に使っているという状態にとどまっている大学が多いのが実情である。今後は英語 e ラーニングをどう使い、また LMS をどう活用し、学習の質を担保するか、そのための教師の役割はどうあるべきか、そして最終的には対面授業と同等、あるいはそれ以上の学習の質をどのように担保できるかについて、知見を共有しながら進んでいく必要がある。実際、LMS を用いると、数百人の学習者に対してでも、彼らがどの程度時間をかけ、また真剣に英語学習に取り組んでいるのか、到底対面授業では把握し得ないようなことを瞬時に把握できる。こういった観点からも、今後の英語 e ラーニングについては、どのように活用するのかのみならず、対面授業とは異なった学習質保証の可能性はどこにあるのか等、一つずつ研究していく必要がある。

4. 研究成果

近年、英語教育において e ラーニングを取り入れている大学が増えているが、e ラーニングも含めたオンライン授業の導入については、大学に限らずすべての教育組織において、対面授業と同等以上の学習質保証が可能かどうか大きな懸念材料となっている。本研究は、英語 e ラーニングの学習質保証という観点において、LMS における管理と教師自身の管理がどのようになされているか、学習データ、教師や学生の側からもそれが有効な形となっており、さらには自律的な学習につながっているかなど、管理と自主性における最適解を探ることを目的としたものである。西日本(九州、中国、四国、近畿地方)にある大学ホームページに掲載されている授業のシラバス情報を調査し、正規の英語授業で英語 e ラーニングを活用している大学はどこまでの程度あるか、実際に使用されている英語 e ラーニングシステムは何か、どのような授業形態で英語 e ラーニングシステムが使用されているか(完全自習型、一斉授業型、ブレンディッド型、宿題型など)、英語 e ラーニングで収集される教材消化率や正解率などの学習データが成績評価にどのように反映されているか、TOEIC 等の標準化テストは活用されているか否かなどを調査した。その結果、多くの大学の正規英語授業で e ラーニングは取り入れられているが、成績評価に反映されるのは、教材の消化率や正解率のみであることが多く、授業の事前・事後で効果測定を厳密に行っている大学はさほど多くないことが明らかになった。また、ほとんど読んだり聴いたりすることなく、クリック・アンド・ゴーを繰り返すといった不適切学習については、不適切学習を判別することが困難であり、ほとんどの場合、何ら対策が取られていないことが明らかとなった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	青木 信之 (Aoki Nobuyuki) (80202472)	広島市立大学・国際学部・教授 (25403)	
研究分担者	池上 真人 (Ikegami Masato) (60420759)	松山大学・経営学部・教授 (36301)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関